

自然誌 だより

Natural history

三重自然誌の会情報誌 129 号

2021年 9月

アオサギはコウベモグラを洗って食べる

最近、アオサギを頻繁に目撃します。増えるのもいれば減る鳥もいて、ゴイサギをほとんど見かけなくなりました。日本のサギ類で最大のアオサギが増えた結果と考えられますが、なぜ増えたのかご存じの方がいましたら教えてください。若かりし頃、友人達と飲み歩いて「ゴイサギさんチーム」とか騒いでいたことを思い出します。ちなみに、ゴイサギは夜行性で、当時TVで放送されていた家族対抗の歌合戦のチーム名に動物の名前が使われていました。アオサギは大型ですので、けっこう大きな餌も食べることができるようで、本誌105号でオオサンショウウオの捕食事例を紹介しました。今度は、コウベモグラを捕食しているところを観察したので報告します。

観察地は松阪市八重田町で、本誌123号掲載のオオタカがチュウサギを捕食したところと同じです。8月12日、昼食のため自宅に戻ってトイレに入り小窓から外を除くとアオサギが何か獣を咥えているのが目に入りました。大きさや毛色から雌イタチと思い、急いでカメラを取って戻りました。カメラの望遠で覗いてみると、スコップ状の手が確認でき、また、腹部が茶褐色で大型であること、平野部に生息することなどからコウベモグラと判定しました。捕獲現場はみていませんが、モグラはダラリとしており既に死亡しているようでした。アオサギはそのまま水路の方に進み、モグラを水につけて洗いました。時々くわえ直してはくまなく全身を洗う動作を15回ほど繰り返した後、頭から呑み込み始め、途中1度水を飲む仕草をして、一気に喉に送り込みました。この間10分ほどで、その後水を一口飲んでから歩き出しました。洗うのを観てアオサギってきれい好きなのかと思ったのですが、ネットで検索してみると呑み込みやすくなるように湿らせただけのようです。が、いちどアオサギさんに聞いてみたいと思っています。



写真 左：コウベモグラを咥えて水路に近寄るアオサギ、右上：モグラを水につけて洗う、右下：頭から呑み込む（2021年8月12日、松阪市八重田町）

（清水善吉：松阪市日丘町 1386 - 17）

ヒバリの仔は隠れ上手ーヒナを安全な草むらへ導いて育てるー

今 堀 聖 史

ヒバリのさえずりが聞こえて立ち止まり、青空に手をかざして探しても鳥の姿が見つけられない。そんな経験をときどきします。「ピーチクパーチク」と表現されますが「ピーチュリ ピーチュリ ピュルピチュリ」などと聞こえ、鳴き方は10通りもあるそうです。4～6月は繁殖期で、田畑の周辺や河川敷、浜辺でヒバリの親子に遭遇することがあります。私は何回かヒバリの親子を目撃しましたが、いつも予期しない出会いでした。賑やかなさえずりに対して、静かな餌運びや巣立ち雛が親鳥の鳴声を区別して行動するようすは面白く、その一例を紹介します。

写真ー1は孵化後9～10日と推定されるヒナが親鳥に誘導されて移動している場面です。翼や尾羽がまだ生え揃っていないので飛べませんが、足は太くてしっかり歩き、親鳥が餌を探しに行くとき草むらに隠れて動かないで待っています。ヒナは草むらに紛れているため、隠れている場所はなかなか見つけられません。ヒナがいるらしい草むらに近づいてしまうと、親鳥は低空でさえずってヒナに動かないよう指示しているようで、場所を離れるとさえずりのトーンが変わります。こうして十分に成長していないヒナが巣を離れ、移動しながら捕食者などから身を隠して約3週間で自立します。餌を探して歩く幼鳥と見守る親鳥に出会うこともあり、近づきすぎると親鳥が偽傷行動をします(写真ー2)。

昆虫を咥えて畔を歩いてくるヒバリを見つけ、近くにヒナがいるだろうと車の窓からそっと見てみると、エッ！と驚く場面がありました。刈ったばかり背丈が低い草陰からヒナ2羽が突然現れて餌をもらい(写真ー3)、さらにメスと思われる親鳥と4羽のヒバリ家族が見られました。1羽が飛立って3羽は再び草の中に見えなくなりましたが、明るい日差しの中で手品を見ているような光景でした。親鳥と一緒にいたのはその場所に巣があって、幸運なことに畔草刈機に巻き込まれなかったのかもかもしれません。あるいは、刈られた畔の草はあまり時間が経っていないし、数枚離れた田や用水路では草刈り作業が行われていたので、ヒバリの親子は作業が済んだ畔に近くから移動して来たのかもかもしれません。田畑の周辺で繁殖するヒバリは、こうした状況乗り越える力を持っているのだと改めて気がされました。

参考文献：佐々木2008. Bird Research News, 5 (3).



写真 1：親(矢印)に誘導されて移動する巣立ち直後のヒナ, 2015. 6. 9 津市香良洲町, 2：偽傷する親鳥(左), 2020. 4. 22 松阪市嬉野算所町, 3：ヒナに給餌する親鳥, 2020. 6. 8 松阪市星合



(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町 1454 - 30)

三重県におけるキバアマガイの記録

中 野 環

キバアマガイ *Nerita (Ritena) plicata* Linnaeus, 1758 は、紀伊半島以南の岩礁域の潮間帯に生息する20mmほどの巻貝です。殻口に強い突起があることが和名の由来のようで、漢字で牙蛸貝と表記されます(肥後・後藤1993)。沖縄県ではごく普通に見られる貝なのですが、紀伊半島では限られた場所でしか記録されていません。私のこれまでの標本では和歌山県白浜町の海岸で採集したものが北限の個体で、私の知る限りでは三重県における本種の生息記録はありません。この度、三重県初記録となる本種の生息を確認したので報告します。

キバアマガイは、三重県南伊勢町田曾浦の海岸で、イシダタミやアマオブネに混じり確認しました。2021年2月28日に2個体(写真1～3)、2021年8月1日に1個体を確認しました。田曾浦に近い浜島町の海岸や、五ヶ所湾を挟んで対岸にあたる南伊勢町相賀浦なども調査しましたが、生息は確認できませんでした。南方系の種であるためか、現在はごく狭い範囲での生息情報しかありませんが、近年、三重県でホソスジウズラタマキビも確認されていることから(中野2020)、冬季の気温や海水温の上昇などの影響を受け、南方系の種の分布が広がりつつあるのかもしれません。

採集記録

- ①TNC-Mo.20431 2021年2月28日採集、殻長：13.76mm、
殻幅：11.43mm
- ②TNC-Mo.20431 2021年2月28日採集、殻長：13.36mm、
殻幅：11.97mm
- ③TNC-Mo.20779 2021年8月1日採集、殻長：11.77mm、
殻幅：10.90mm

※採集地はいずれも三重県南伊勢町田曾浦

引用文献

肥後俊一・後藤芳央1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録. エル貝類出版局, 八尾, 693pp.
中野 環2020. ようやく手にした三重県産ホソスジウズラタマキビ. 自然誌だより, (125), 6.



写真1. キバアマガイの生息状況 (2021年2月28日)



写真2. 殻口の様子



写真3. 匍匐する様子

(なかの たまき：度会町大野木1711-1)

コブシハバチの被害

篠 木 善 重

コブシハバチ *Megabeleses crassitarsis* (ハチ目ハバチ科) の幼虫がオオヤマレンゲ (モクレン科) の葉を食害していたとして、佐野 (2021) によって三重県から初めて本種の生息が明らかにされた。

本種は後脚の転節基半と腿節基半が白色で、小楯板後縁部も白色、腹部背面の第1節と第2節の間も白色部を有することなどにより成虫の同定は比較的容易である (写真1)。筆者は2012年に本種の成虫を亀山市で採集していて、昨年には、30年ほど前に畑に植栽したシデコブシ *Magnolia stellate* (購入時は姫コブシの名前で売られていた) が幼虫の食害により丸坊主にされてしまった (写真2)。今春ようやく成虫の生態写真 (写真1) を撮影することができたため、改めて県内のシデコブシ自生地などでの調査を行ったところ、各所において幼虫による食害などが確認できたので報告する。

1. 菰野町田光のシデコブシ及び湿地植物群落 (国指定天然記念物)

2021年5月8日、数十株を調べたところ、1株から幼虫が確認された (写真3、4)。

2. 四日市市桜町のシデコブシ自生地 (四日市市指定天然記念物)

5月8日、ミルクロード沿いの、三重交通高速バス停の桜花台駐車場南側にある自生地 (写真5) で2株に幼虫 (写真6) が確認できた。三重の自然と希少生物を守る会の Facebook によると、2020年5月20日に撮影した「シデコブシの葉を食しているコブシハバチの幼虫」写真を同年5月21日に投稿している。三重県下で初めて自生地が発見された地で、故・市川雄二氏に案内していただいたことのある場所。

3. 四日市市川島町のシデコブシ自生地 (県指定天然記念物)

5月14日、鹿化川沿いの桜並木を歩いていくとたどり着く川島町八ツ谷の自生地 (写真7) で、説



写真1 コブシハバチ成虫。2021年4月8日、津市河芸町中別保



写真2 コブシハバチの幼虫による食害を受けたシデコブシ。2020年5月22日、津市河芸町中別保



写真3 菰野町田光のシデコブシ及び湿地植物群落、右手の株で幼虫を確認。2021年5月8日



写真4 コブシハバチの卵(葉裏に産み付けられている)と幼虫の食痕。2021年5月8日、菰野町田光



写真5 桜町の自生地。2021年5月8日、四日市市



写真6 コブシハバチ幼虫。2021年5月8日、四日市市桜町



写真7 川島町シデコブシ自生地. 2021年5月14日, 四日市市



写真8 コブシハバチの幼虫. 2021年5月14日, 四日市市川島町



写真9 シデコブシの葉裏に産み付けられたコブシハバチの卵. 2021年4月21日, 津市河芸町中別保

明板近くの1株1ヶ所から幼虫を確認した(写真8)。

4. その他の地域

亀山市椿世町の里山公園は、筆者が県内で初めて本種の成虫を採集した場所であるが、5月14日の調査では敷地内にモクレン科の樹木は確認できなかった。おそらく枯死したものと思われる。また、津市河芸町中別保の植栽シデコブシは昨年に続いて多数の幼虫が発生したが、植栽地から数百mの範囲内に植栽されているオオヤマレンゲ1株とシモクレン1株からは本種の幼虫は確認できなかった。なお、シモクレンを植栽している住民にお聞きしたところ、植木職人に毎年殺虫剤を散布してもらっているとのことであった。6月20日に河芸町上野の円光寺に植栽されているハクモクレン1株の葉に食痕を見つけた。

成虫の出現期は短く、なかなか成虫と巡り合うことはない。今年の河芸町中別保での観察によると、4月8日に7頭ほどの成虫を初見し、9日には卵を確認した。その後10日間は観察していないが、20日以降には姿を全く見かけていない。卵は必ず葉裏に産み付けられていて、21日に観察したほとんどの卵には幼虫の脱出口が確認できたが(写真9)、孵化しているはずの幼虫の姿は見当たらなかった。しかし、27日にはおびただしい数の幼虫が葉を食べていた。ところが今年は、株の上部の葉はほとんど食べられず、やがて幼虫たちは何処かへ姿を消していき、食べられた下部の葉も6月中にはすっかり新葉を展開して、食痕のある葉さえ発見しづらくなった。

採集標本

亀山市椿世町里山公園, 1頭, 27-IV. 2012, 篠木採集. 矢代 学同定.

津市河芸町中別保, 1頭, 8-IV. 2021, 篠木採集. 筆者同定.

なお、標本の同定をいただいた矢代 学氏と仲介のお骨折りをいただいた川添昭夫氏のお二人に感謝申し上げる。

文 献

佐野 明2021. 三重県津市でコブシハバチを確認. ひらくら, 65(1), 12-13.

Facebook 三重の自然と希少生物を守る会. 2021. 7. 10閲覧.

(しのぎ よししげ: 津市河芸町中別保2230-1)



写真 左: 迷岳山頂から望む東尾根. 右: 迷岳山頂付近のブナ林. 計画ではどちらにも風車が建つ. 本年9月7日に唐谷川コースで行ってきました. 2時間半ほどの行程ですが、ヒルが苦手な方(好きな人はいないが)は涼しくなっ
てからの方がよいかも.

両生・爬虫類の餌となるコオロギ類について

河 北 均

ペットショップでは両生・爬虫類の餌として生きたコオロギ類を販売しています。いつ頃からコオロギがペットの両生・爬虫類の餌として利用されるようになったのでしょうか。餌として利用されているコオロギはフタホシコオロギ *Gryllus bimaculatus* Degeer とイエコオロギ(ヨーロッパイエコオロギ) *Acheta domesticus* (Linnaeus) の2種です。最初にフタホシコオロギが利用され、その後イエコオロギも利用されるようになったようです。これら2種の由来はどうなのでしょう。

フタホシコオロギは南西諸島、東南アジアに分布しています。昔のことなので記憶も曖昧なのですが、カエルの研究をしていた広島大学に餌となるフタホシコオロギを提供したという話をコオロギ研究の大家、故・松浦一郎氏から聞いた覚えがあります。おそらくこれが日本で両生・爬虫類の餌となったルーツでしょう。

イエコオロギが日本で最初に発見されたのは静岡県島田市です。1970年代に杉本 武氏が島田市で発見してシマダコオロギと仮称され、日本未知の種であったので新種ではないかと思われましたが、松浦一郎・上島法博両先生によって *Acheta domesticus* と同定されました。ついで、1977年に愛媛県伊予三島市から今川義康氏によって発見されウメタテコオロギと改称されます(今川1999: ぱったりぎすNo.121, 小川・今川1999: 四国虫報No.34)。両産地とも既に絶滅しているようです。これらは外国から輸入された荷物にまぎれてきたものと思われます。多化性卵非休眠であることから本州では野外での越冬は厳しいと思われますが、愛媛県の例では数年間発生し続けたようです。

その後、本種の話は途絶えますが、思わぬところから本種が見つかります。ペットショップです。気づいたときは、かなり流通しており、この経緯については分かりません。両生・爬虫類の餌であることから輸入されたものだと思います。生きた昆虫を外国から輸入するには「植物防疫法」「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律(外来生物法)」、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約(ワシントン条約)」によって規制されています。農林水産省植物防疫所のホームページ(www.pps.go.jp/rgltsrch/)の「生きた昆虫・微生物などの規制に関するデータベース」ではイエコオロギが2016年に輸入された記録がありますが、国内に流通したのはこれ以前のような気がします。私は両生・爬虫類のペットを飼っていないので、わかりません。

いつ頃からイエコオロギがペットの餌として日本で利用されるようになったのかご存知の方、両生・爬虫類の飼育に詳しい方、教えていただけませんか。もし、分かれば輸入の経緯や輸入国なども教えてください。

末筆ながら、写真を提供いただいた梅村有美氏に感謝します。



写真1 フタホシコオロギ



写真2 イエコオロギ(終齢幼虫)

(かわきた ひとし: 伊勢市岡本1丁目17-18)

モグラによると推察されるニホンイシガメ卵の食害について

上 田 利 彦

私が、自宅の庭で2002年からニホンイシガメを飼育し(写真1)、2015年以降繁殖を確認したことは本誌114号(2017年12月)で報告済みであるが、今回、産卵された卵がモグラによる食害を受けたと思われる事象が確認されたので報告する。

2017年の報告以降、7個体を最多として毎年仔ガメの孵化を確認してきたが、昨年、産卵は確認されたものの仔ガメの孵化を確認することができなかった。冬に飼育場の陸地を耕起するのに合わせ確認したところ、いくつかの破断した卵殻が確認された。正常に孵化した場合、卵殻はほぼ一個分が丸まった状態で残されることをこれまでに確認していたため、これらの卵は正常に孵化することがなかったものと判断した。その際、時期は定かではないが飼育場でモグラの坑道を確認していたことから、モグラによる食害ではないかと考えた。

昨年度と同じ飼育状況のまま、今年は6月15日と7月30日に産卵を確認し、モグラの出現を注視しながら秋の仔ガメの孵化を楽しみにしていた。8月8日早朝、飼育場の陸地の角で土が少し盛り上がりほぐされているのを確認した。周辺を細い棒で注意深く突いてみたが坑道は確認できなかったので放置した。

本会事務局の清水善吉氏に、カメ卵のモグラによる食害について聞いたところ、そういった記録はないが、雑食なので可能性もなくはないこと、モグラの坑道をアカネズミなどが利用することが知られており、それらネズミ類による食害の可能性もあることなどを教えていただいた。

その後も、早朝の給餌時と夕刻、就寝前の観察を続けた。8月12日深夜の観察では異常はなかったが、13日早朝、陸地のほぼ半分が全体的に盛り上がっているのを確認(写真2)、慎重に掘り返したところ、表面より3cmほど下に坑道があり、その周辺に散乱した卵殻の断片をいくつか確認した(写真3)。本誌113号(2017年9月)で愛犬がコウベモグラを捕獲したことを報告しており、食害の犯人もコウベモグラではないかと推察している。なお、掘り出した卵殻はその色合いから新しいものとやや古いものがあり、数日にわたり食害していたのではないかともしられた。また、常時入り込む状況ではないことから、ある程度発生が進んだ時期を狙ってきているとしたら、モグラの学習能力の高さがうかがえる事象でもある。

さて、2年にわたり食害を受けているのではないかと推測し、今後も観察を続け推測を確認に替えたところではあるが、来年度はイシガメのためにモグラの侵入を阻止したいと思う。

(うえだ としひこ：津市久居一色町176-1)



写真1 イシガメ飼育場



写真2 モグラによる地表の盛り上げ(中央上)とトンネル(左下)



写真3 食いちぎられた卵の殻

奥香肌峡に風力発電計画

櫛田川は台高山脈北部を源流とし、東流して伊勢湾に注ぐ流程85kmに河川で、ちょっと風流な名前は倭姫命が櫛を落としたことに因んでいます（角川 日本地名大辞典「三重県」）。源流域は室生赤目青山国定公園に、中・上流域は香肌峡県立公園に指定されており、ザクッと表現すると「自然をうり」にしている地域です。なお、香肌という艶っぽい地名は、流域でとれる茶・シイタケ・アユなどの産品がいずれも上質で香り高いことが由来とありますが（ウィキペディア）、かつては川俣（カバタ）谷と称されていたようなので（前出辞典）、あて字をしただけでしょう。その香肌峡の上流－奥香肌峡－に風力発電の建設が計画されています（写真、5ページ掲載）。

奥香肌峡のなかでも規制の厳しい国定公園は除外して（規制に興味のある方は本誌80号参照）、県立公園内に60基と国内最大規模の風車を建てる計画です。法規制が緩やかな地域であると言っても、高見山からの眺望が風車だらけでは興ざめですし、大断層沿いだけに災害も心配です。今でも山腹の崩落地が目につきますが、稜線まで道路が通ることによって、景観は大きく変わることが予想されます。この地域は、木屋谷川や宮ノ谷、江馬小屋谷、布引谷川、唐谷川等の美しい渓谷があり、また、自然林が多く残されていることから、四季を通して多くの人が訪れる、秘境・大杉谷に匹敵する場所です。



唐谷川のオオダイガハラサンショウウオ
（2017年5月21日、和久田美穂・撮影）

また、自然公園に期待される役割には、自然の風景地を保護するとともに、「生物多様性の確保」もあります。奥香肌峡は、まさに生物多様性のホットスポットであり、カモシカやヤマネ、オオダイガハラサンショウウオ（左下写真）等の天然記念物やヒメヒミズやツキノワグマ、ハコネサンショウウオ等の希少生物が生息します。風車建設によってこれらの生息地は大きく改変されることは間違いなく、「保全対策」で対応できるとは考えられません。

さすがに、あそこに風車はないだろうと思う方は多いようで、反対の声は全国的な広がりを見せています。今夏、環境配慮書に対して意見を募集していましたので、MLの会員さんにはご案内し、私も意見を提出しました。青山高原を風車団地にしてしまったという失敗がありますので、同じ轍は許されないと考えています。今後の動向に注意を払い、完全撤退を目指していきます。

（清水善吉：松阪市日丘町1386-17）

編集後記

篠木さんの原稿を読んでいて、天然記念物指定地内での調査が多いことに引っ掛かりました。通常、天然記念物の調査の際には「現状変更許可」を得て行いますが、ご本人に確認すると何それっという感じの返答で、必要であるとも思っていなかったようです。違法であれば当然、本誌に掲載できませんので、県・町の担当者に電話で事情を話して確認しました。幸い指定地内では採取行為を行わず、観察して写真撮影をただけでしたので、今回は掲載可能となりました。こう書くと、天然記念物は指定しっぱなしで保護対策を何もしないくせにと思われる方もみえるでしょうが、法を破っていいことにはつながりません。調査にあたっては法令遵守を御願います。秋号は12月発行予定ですので、多くの投稿お待ちしております（善）。

自然誌だより129号 Mie Natural History Research Group News, No.129

発行日 2021年9月17日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:shumizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp